

お寺のあり方について偶感

先日『21世紀の精円幻想論』（平川克美著、ミシマ社、二〇一八）という本を読んでいたら「お金」というものは「交換を促進する道具」であると同時に「関係を断ち切る道具」でもあると書かれていました。

なるほど、何かをして貰った対価としてお金を支払うことで、相手に負った負債は帳消しになるのですね。

また次のようにも示されていました。

以前
Ⅱ・共同体モデル
・相互扶助原理
・縁という負債でつながっている社会

以後
Ⅱ・消費者モデル
・等価交換原理
・金銭的な負債関係を絶えず更新する社会

どうやら私は、知らず等価交換原理だけで物事を考えていたようです。「日供講に入ればこういう特典がありますよ」などというのはまさに消費者モデルですが、もともとお寺は、誰かのおかげで建てられました。お寺は本来、社会に負債を負っている存在です。

昭和28年に宗教法人法が施行され、昭和60年代頃から住職等への課税強化と共に、公私の区別が厳しくなりました。近年は社会保険への加入も義務とされ、お寺も事業所として会社法人などと変わらぬ体裁が求められています。そうした中「自立できなければ存続できない」と考えて来ましたが、果たしてそれだけが、持続可能な経営方法なのだろうか？と感じました。少し違った視点で考えてみたいと思います。

實相寺 花園会報

令和三年

六月一日発行

発行所

臨濟宗妙心寺派

陽明山 實相寺

實相寺花園会

〒761-0450

高松市三谷町

1811番地1

TEL087-889-3838

編集発行人

山本文匡

<https://www.jissouji.net>

第146号

お寺の掲示板

「したたり落ちる雨だれに、軒下の石が長年の間にくぼんでいるのを見るにつけ、何事によらず、それは困難で出来ることではないと、物事を思い捨ててよいものか、決してそうではない。」 中略

近い昔の小学校の先生も、同じように生徒に教えられた記憶がある。当時雨にくぼんだ石を見るのも容易であったから、これを眼のあたり実感することもできたが、今はこうした好個の教育材料も身近なところから消えてしまっている」

雨だれに
くぼみし軒の
石みても
堅きわざとて
思いすてめや

お釈迦さまの伝記・仏伝について⑥

さて梵天勸請ぼんてんかんじようによって人々に教えを説くことを決意したお釈迦様ですが、お釈迦様が悟った内容は難解でしたので、誰にでも簡単に理解出来るものではないありません。そこで、お釈迦様が最初に思いついたのは、かつて瞑想法を習ったアーラーラー・カーラーマ仙人やウツダカ・ラーマプッタ仙人でした。

最古の仏伝はお釈迦様が悟りを開いたところから始まっていますが、ここでお釈迦様はそれまでの出来事を述べます。お釈迦様が出家して森の中に入ると、すでに沙門しゃもんと呼ばれる出家修行者達が暮らしていました。そこで、まずはアーラーラー仙人の処に行き、瞑想方法を学びます。やがてお釈迦様はアーラーラー仙人と同じ「空無辺処」

または「無処有処」という境地に到りますが、それに満足せず仙人の元を去ります。次にウツダカ仙人を訪ね、さらにレベルの高い「非想非非想処」という境地に達しますが、やはり満足せず仙人の元を去りました。

ですからお釈迦様は自分が得た悟りの境地を最初に説くのは、この二人が相応しいと考えましたが、残念ながら、アーラーラー仙人は七日前、ウツダカ仙人は昨晚亡くなっていました。

そこで、お釈迦様は、ウツダカ仙人のもとを辞した後、一緒に修行した五人の比丘達を思い出します。一説には、この五人はお釈迦様が出家した際、お釈迦様を見守るよう父である王が命じた家来だとも言われますが、共に何年も苦行した結果、苦行では悟りは開け

ないと苦行を辞めたお釈迦様が墮落したと軽蔑し、その後も五人で苦行を続けていました。「あの人達こそ、私が最初に教えを説くのに相応しい」と考えたお釈迦様は、彼等がいるバラナシの鹿野苑ろくやえんに出かけていきました。

五人の比丘達はお釈迦様が近づいてくるのを見て、「ゴータマは厳しい修行を捨てた奴だ。近くに来ては挨拶するのは辞めよう」と示し合わせていましたが、しかしお釈迦様のその立派な姿に心を打たれて、思わず立ち上がって挨拶し、衣鉢を受け取り、座をしつらえて、足を洗う水と布巾を用意してしまつたといいます。

その時、お釈迦様は、五人に「先ほどあなた達は私を『ゴータマ』と呼びましたが、今後は私を『ゴータマ』と

か『あなた』と呼んではならない。私はあなた達の指導者になりますから」と言いました。これは少し傲慢に聞こえますが、要はお釈迦様は五人の比丘と対等な立場ではなく、五人の比丘に教えを説くためにやって来たことを意味します。

しかし、急にそう言われても五人は納得しません。押し問答の末、お釈迦様は「私はこれから我々が何のために出家したのか、その本当の目的を示しますから聞いて下さい」といい、はじめて比丘達もお釈迦様の話を聞く姿勢が調いました。

そこで、お釈迦様は生涯最初の説法をします。これを「初転法輪」といいます。



佐々木先生の動画